

スペイン語の否定極性と不定性

加藤 ナツ子

Negative Polarity and Indefiniteness in Spanish

Natsuko KATO

Within the principles and parameters framework (Chomsky 1981, 1995) a number of proposals have been made with regard to the so called n-words in Spanish (and other Romance languages) as outlined in Kato (1995). Recently a novel perspective has been proposed to regard negative polarity items in English and other languages as indefinites in the sense of Heim (1982). Two recent studies, namely Piñar (1996) and Aranovich (1996), also analyze n-words in Spanish as indefinites extending Heim's proposal.

Although they share basic assumptions on indefinites, Piñar and Aranovich's proposals differ in fundamental respects, especially on the status of n-words and NPIs. Whereas Piñar regards n-word licensing as a subcase of NPI licensing, Aranovich claims that the two licensing systems are different grammatical processes.

In the present paper, a comparison is made between the two analyses. We will try to clarify the similarities and differences in their claims and evaluate them. A review is made in section 1 on their views with respect to the similarities and differences of n-words and NPIs. The subsequent two sections are a survey of Piñar's claims and Aranovich's claims respectively. In the final section a comparison and an evaluation will be made.

0. スペイン語(及び他のロマンス諸語)のいわゆるn語(n-words)について、従来生成文法理論に基き様々な提案がなされてきた。その概略は加藤(1995)で紹介したが、その後英語等の否定極性項目(Negative Polarity Items=NPI)を不定語(indefinites)として分析する研究が注目されるようになってきた。¹⁾スペイン語に関しても、Piñar(1996)、Aranovich(1996)がHeim(1982)の分析²⁾を否定に拡張しn語を不定語とする分析を示している。彼らは不定語に関しては共通の仮定に立ってはいらぬものの、様々な点で異なる主張をしている。最大の相違点は、Piñarがn語はNPIであり、否定一致(n語認可)はNPI認可のサブケースであると主張するのに対し、Aranovichは否定一致とNPI認可は異なる文法現象であると捉える点である。

本稿では両者の主張がどの点で類似しており、どの点で異なるかを明らかにし、その妥当性を検討する。まず第1節では彼らがn語とNPIの類似性と相違点をどのように捉えているかを見る。第2節ではPiñarの主張を、第3節ではAranovichの主張を概観し、最後に第4節で両者の主張の共通点、相違点をまとめ、n語を不定語とみなす分析の妥当性を考察する。

1. N語とNPIの類似性及び相違点

Piñarがn語をNPIとみなす従来のBosque-Laka路線(Bosque 1980, Laka 1990)を踏襲するのにに対し、Aranovichはn語とNPIの違いに注目する。この仮定の差から彼らの主張の相違が生まれている。まずn語と

NPIの類似性、相違について彼らがどのような主張をしているかを見てみよう。

N語をNPIとみなすか否かで問題になるのは、動詞の前に位置するか後に位置するかでn語が異なる分布を示すという事実である。動詞に先行するn語は他の否定要素を必要としないが、動詞に後続するn語は動詞の前に否定要素を必要とする。³⁾

(1) a. Nadie (*no) ha venido.

b. (*No) ha venido nadie.

‘Nobody has come.’

従来の研究は三つの立場に大別できる。N語は英語のnobodyのような否定量化詞であるとする立場 (Zanuttini 1991)、anybodyと同じようなNPIとする立場 (Bosque 1980, Laka 1990, Suñer 1995)、あるいは否定の環境でのみ否定量化詞であり、他の環境ではNPIであるとする立場 (Longobardi 1991) である (詳しくは加藤1995参照)。

Piñarはn語とNPIの類似性を強調し、BosqueやLaka に基いてn語をNPIとみなす分析を採用すると明言している。それに対しAranovichは n語とNPIの差を強調するが、n語とNPIの類似性をも捉えている。Piñarの議論はn語認可の特性を明らかにすることに集中しているが、Aranovichはn語認可とNPI認可の差を示すことに力を注いでいる。従って両者は一見全く異なる主張をしているように見えるが、どちらもNPI分析が基本にある点で共通している。

PiñarもAranovichも動詞に前置するn語に関しては非常に簡単な説明をしているだけである。PiñarはLaka (1990), Bosque (1994) に従い、動詞の前のn語は、NegPのSpec位置を占め、無形の主要部とのSpec/head一致によって認可されると仮定する。動詞の前のn語認可について彼女が述べているのはこれだけであり、残りの部分は全て動詞の後のn語認可に関する議論にあてられている。

AranovichはLadusaw (1992) に従い、動詞に前置するn語はNegPのSpecに位置し、形態的素性により抽象的な否定演算子を認可するとしている。これは空のNeg主要部がn語を認可するというPiñarらの主張とは認可の方向が逆である。さらにAranovichによる形態的素性とはNeg素性を指すと思われ、n語自体が否定の意味内容をもたないというPiñarの主張とは対立する。動詞に前置するn語については彼もこれ以上のことは述べていないが、動詞の前にNPIが生起できないことの説明は試みている。⁴⁾

PiñarもAranovichも動詞の後のn語はそれをc統御する位置にある演算子に認可されると主張する。しかし何が認可者となる要素であるかに関して彼らの主張は分れる。PiñarはBosque (1980) やLaka (1990) に従い、否定辞、n語だけでなく、以下の例が示すように他のタイプのdownward entailing (DE) 演算子 (Ladusaw 1979)、また疑問や比較のような他の喚情的 (affective) 文脈もn語を認可できると主張する。

(2) Has jugado nunca al fútbol?

‘Have you ever played football?’

(3) Enrique se cree más listo que nadie.

‘Enrique thinks that he is smarter than anybody.’

(4) Dudo que vaya a venir nadie.

‘I doubt that anybody will come.’

(5) Apenas comí nada.

‘I barely ate anything.’

これらの事実はBosque (1980), Laka (1990) も指摘しているように、n語をNPIとみなす根拠となる。

これに対しAranovichは、Bosque やLakaはn語とNPIの類似性には着目したが両者の相違を過小評価していると主張する。また動詞に後置するn語の認可のデータに関しては方言差が非常に大きいので、注意深く評価せねばならないとする。Aranovich自身のアルゼンチン、ラ・プラタ地方の方言では、完全に文法的なのはsin ‘without’の補部のみだという。それ以上に彼が問題とするのは、英語の極性に反応するanyを認可する全ての文脈でn語が認可されるわけではないことである。(a) 条件節、(b) 疑問文、(c) 焦点不変化詞、(d)

節比較、(e) 感情的述語の補部ではNPIは認可されるが、n語は認可されない。

- (6) a. If anyone can move that stone, I'll be amazed.
b. Have you talked to anyone today?
c. Only now do I understand anything about string theory.
d. Gabriela plays better than what anybody thought she would.
e. You should be glad that anyone likes your novels.
- (7) a. *Si invitas a ninguno de tus amigos, me iré a casa.
'If you invite any of your friends, I will go home.'
b. *Has hablado con nadie hoy?
'Have you talked to anyone today?'
c. *Sólo ahora comprendo nada acerca de Teoría de Cuerdas.
'Only now do I understand anything about String Theory.'
d. *Gabriela juega mejor de lo que pensaba nadie.
'Gabriela plays better than what anybody thought she would.'
e. *Gracias a Dios que conocemos a nadie en Los Angeles.
'Thanks to God that we know anyone in Los Angeles.'

彼が特に問題にするのは、通常n語をNPIとみなす根拠の一つとされる比較構文である。比較には句比較と節比較があるが、n語は句比較にしか現れることができない。

- (8) a. El chocolate me gusta más que nada. <句比較>
'I like chocolate more than anything.'
b. *Gabriela resultó mejor tenista de lo que era nadie. <節比較>
'Gabriela ended up being a better player than anybody else was.'

Hoeksema (1983) によると句比較はDE環境を作らないので、句比較に現れるanyはNPIではなく自由選択 (free choice) のanyである。これに従いAranovichは句比較のn語も自由選択のn語と見なし、最上級のn語 (superlative n-words) と呼んで、否定一致のn語とは区別する。⁵⁾

Aranovichはさらにdudar 'doubt'のような反意 (adversative) 述語の補文内のn語も最上級のn語とみなす。その理由としてこの環境でのn語は物質名詞の限定詞に生起できないこと、またcasi 'almost'に修飾されないことが挙げられている。しかし句比較の場合はDE環境にないのに対し、dudar類はDE環境で極性に反応する。従って最上級のn語はDEの文脈から排除されてしまうわけではない。要するに最上級のn語は極性項目とは異なりDE文脈に生起が限られていないが、自由選択項目ほど「自由」に生起できず、何らかの方法で認可されねばならない。

N語をNPIとみなす議論は、n語もNPIも否定以外の環境に現れることを根拠としていたが、それらは否定一致のn語ではなく、最上級のn語を認可する文脈であるとAranovichは主張する。さらに否定一致のn語が認可されるのは文否定に相当するDE文脈の部分であるので、n語をNPIと分析すると一般化がとらえられない。これらのことから否定一致のn語はNPIではないと彼は結論付ける。

2. Piñar (1996) の分析

Piñarは直説法/接続法の非対称性を補文の前提性に基き、また複合名詞句制約を特定性の効果に基き説明する。さらに主節の否定が埋め込まれた節内のn語との間に介在する量化詞とが結びついてn語を認可するという提案をする。不定語仮説を支持する証拠としては直説法疑問補文内のn語認可を論じる。その過程で、彼女はn語が元位置で (in situ) 認可されること及び、n語に否定の意味内容がないことを支持する。以下ではこれらの主張を見てゆく。

2.1. 前提性と特定性に基く元位置認可

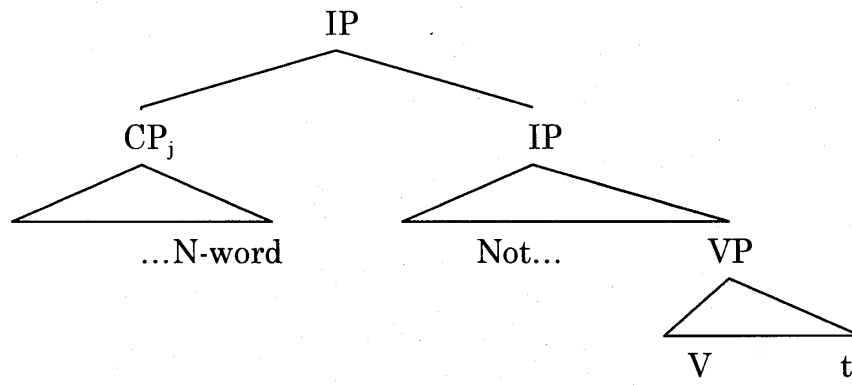
N語認可のどの分析においても問題となるのは、直説法の補文にあるn語は主節の否定によって認可できないが、接続法補文内のn語は主節の否定によって認可されるという事実である。Laka (1990) はn語認可が否定補文標識により局所的に行われると提案したが、Uribe-Etxebarria (1994) はLakaの分析では主節と従属節の時制が一致している場合としていない場合との差が説明できない点が問題であると指摘する。Uribe-EtxebarriaはStowell (1993) の時制理論に従い、この差は時制認可条件に関する独立した原理によって説明されるとし、NPI認可が厳密に局所的であるという仮定を否定する。

これに従いPiñarは、補文の前提性に基く節繰り上げ仮説 (clause raising hypothesis=CRH) を提案する。Lakaも指摘しているように、埋め込まれた直説法節は話者により真であると前提されるが、接続法節の真理は前提されていない。真であることが前提されている節はLFで繰り上げを受けて主節に付加し、主節の否定の外に作用域を取る (10) のような構造になると仮定する。そうすると繰り上がった節内のn語が主節の否定にc統御されなくなるので、認可されないことが説明される。⁶⁾

(9) *Juan no recuerda [que conoces-IND a ningún artista].

#'Juan doesn't remember that you know any artists.'

(10)



さらにPiñarは、複合名詞句の場合にも同様の分析を提案する。Longobardi (1991) は (11) のような文でn語に広い作用域の読みが与えられないのは移動が複合名詞句制約により妨げられるからであると主張する。

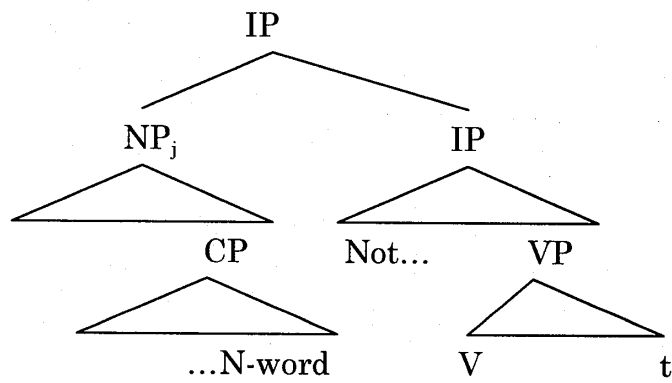
(11) *Non approveri [NP tua proposta [IP di vedere nessuno]].

#'I will not approve your proposal to see anyone.'

これに対してPiñarは (11) が非文法的なのは、n語を含む複合名詞句が高度に特定の概念であることによると主張する。N語を含む複合名詞句は否定よりも広い作用域を得るためにLFで繰り上がらなければならず、

(12) が示すように否定の作用域の外に出たn語は認可されない。

(12)



(12) は (10) に対応している。前提性と特定性の概念が密接に関係していることを考えると、直説法の場合には (10) のように節が繰り上がり、特定の名詞句の場合には (12) のように名詞句の繰り上げが起こる

と仮定すれば、一見して全く関係のないように思える異なった現象を統一的に扱うことができるというのが Piñar の主張である。

関係節内の n 語認可も同様に説明される。関係節内の n 語認可には直説法/接続法の非対称性が見られる。直説法の場合は複合名詞句全体が広い作用域の読みになり、n 語が LF で主節の作用域から出るため主節の否定による認可はできない。接続法の場合は名詞句の広い作用域の読みが不可能なので、n 語は主節の否定の作用域内にとどまる。Wh 移動は関係節の法にかかわらず不可能なので、移動に基づく分析では (13a) と (13b) の差を説明できない。

- (13) a. *Nunca he conocido [a un entomólogo [que sabe-IND nada de sintaxis].
b. Nunca he conocido [_{NP}a un entomólogo [_{CP}que sepa-SUB nada de sintaxis].
'I have never met an entomologist who knows anything about syntax.'

Piñar はまた Moritz and Valois (1992, 1994) が n 語の移動分析の根拠とする主題階層制約 (thematic hierarchy constraint = THC) をも特定性に基き説明する。ロマンス語の DP (determiner phrase) からの取出しは possessor > agent > theme の主題階層に従い、最も階層の高い項だけが DP から抽出できるということが指摘されてきた (Cinque 1980, Torrego 1986, Valois 1991)。Moritz and Valois によると、n 語も同じ階層条件に従い LF での取出しが (不) 可能になる。しかしスペイン語では DP からの取出しは THC の予測より制限が厳しい。最も主題階層が高いため取出しが可能であるとされるフランス語の例に対応する文は、スペイン語では非文法的になる。

- (14) *De qué coleccionista_i ha visto Julio [_{DP}la foto de este_(agent) t_{i(possessor)} fotógrafo]?
'Whose collector has Julio seen the picture by this photographer?'
(15) *Julio no ha visto [_{DP}la foto de este fotógrafo_(agent) de nadie_(possessor)].
'Julio has not seen anybody's picture by this photographer.'

Piñar は (14), (15) の非文法性を DP の高度な特定性に帰す。どちらの DP も定冠詞に導かれているだけでなく、(14) の動作主は定冠詞に、(15) の所有者は指示詞に導かれており、非常に特定性が高い。(14), (15) で n 語の認可を妨げているのが DP の特定性であるということは、n 語が極性認可条件に従う項目であり、特定の DP は解釈されるためには否定よりも広い作用域を取らなければいけないという仮定から導かれると彼女は主張する。

2.2. Neg... [QNP ... N-word] 構文における n 語認可

Piñar は n 語認可が LF での統語的な移動によって行われるのではないことを示し、また n 語には内在的な否定の意味内容がないことを支持するために、主節の否定と埋め込まれた節の目的語位置にある n 語との間に量化詞が介在する次のような構造を考察する。

- (16) Neg ... [QNP ... N-word]

この構文は一見すると弱い島のように見えるが、弱い島の効果に基づく移動分析では説明がつかないと Piñar は主張する。ここで Rizzi (1990) に従い、非指示的句の取出しだけが弱い島の影響を受けると仮定すると、n 語は非指示的であるから、n 語の移動に基づく分析では弱い島を作る要素が介在する場合には n 語認可が妨げられることが予測される。しかし (17), (18) の対比は移動に基づく分析では説明できない。

- (17) *No creo [que menos de dos personas sepan nada].
#I don't believe that fewer than two people know anything.'
(18) No creo [que más de dos personas sepan nada].
'I don't believe that more than two people know anything.'
='I believe that not more than two people know anything.'

Piñar は (18) では主節の否定が monotone increasing な量化詞を含む名詞句と結びついて DE 文脈を生み、それが n 語を認可すると提案する。それに対し (17) では介在する QNP 主語は monotone decreasing 量化詞なの

で、主節の否定と結びつけられると upward entailing (UE) 文脈を生み、n語は認可されない。

この構文の観察から Piñar は n語が内在的に否定の意味をもたない要素であることを導き出している。介在する要素が n語の場合、n語が否定量化詞ならば、否定と結びついた場合には UE の文脈になり、n語は認可されないはずであるが実際には認可される。

(19) No creo [que nadie sepa nada].

'I don't believe that anybody knows anything.'

(19) を (17) と比較すると、n語は他の DE 量化詞のようにふるまわないことが分かる。(19) は複数の (非選択的な) NPI 認可と見なすべきであり、文全体が一つの否定しかもたないと解釈されるのは内在的な否定意味をもった要素が否定主要部だけだからである。従って二つの n語のどちらも内在的な否定の意味をもっていないと彼女は結論付ける。

介在する語が普遍量化詞 (UQ) の場合、一見 Piñar の仮説に従わない結果となる。UQ は UE 特性をもち、従って主節の否定の下に埋め込まれると DE 文脈になるはずだが、実際には n語は認可されない。

(20) *No creo [que todo el mundo sepa nada].

#'I don't believe that everybody knows anything.'

この点については Piñar は問題点として指摘しているだけで、n語及び NPI 一般が認可される意味的環境において、DE は必要条件の一つに過ぎないかもしれないという示唆を与えるにとどまっている。

2.3. 直説法疑問補文内の n語認可

N語を不定変項と見なす議論の中心となるデータは、通常の直説法/接続法の対比がなくなる場合である。Bosque (1994) が指摘するように、埋め込まれた節が +wh の場合は、直説法節の境界を越えて否定一致が可能になる。⁸⁾

(21) No recuerdo [qué optativas ha-IND elegido ningún estudiante].

'I don't remember which electives any students have taken.'

(22) No sé [qué regalo le corresponde-IND a nadie].

'I don't know which present belongs to anyone.'

Piñar は Berman (1991) と Lahiri (1991) の提案に基づいてこの構文の説明を試みる。彼女は Berman (1991) の wh 節分析に基づき、wh 節を不完全文 (open sentence) と仮定すれば、直説法の疑問補部境界を越える否定一致が可能な理由を説明できると主張し、n語を不定変項とみなす分析がこれらのデータに正しい解釈を与えるとする。Berman は wh 節が if 節と同じように、三つの部分からなる量化構造を形成すると論じる。その根拠は (23) が示すように wh 句が普通の不定句と同じように意味的に可変的であり、wh 節と if 節が並行したふるまいを示すことにある。

(23) a. The principal usually finds out [which students cheat].

b. The principal usually finds out [if a student cheats].

c. For most students who cheat, the principal finds out that they cheat.

(23a) と (23b) は共に (23c) が示すようにパラフレーズされる。(23a) の wh 句 which students は、(23b) の不定句 a student と同様、主節の副詞の量化を得ることができる。Berman は wh 句がその限定に自由変項を導入できると結論する。

この構造は n語を変項として扱う証拠を提供すると Piñar は議論する。(24a) では wh 語と n語が対の読み (pair reading) でのみ解釈される。Wh 語と n語は主節の否定演算子により量化的意味が決まり、(24a) の解釈は (24b) のようになる。さらに主節の演算子が量化副詞の (25a) においても主節の演算子が wh 語と n語の両方の量化的意味を決定する。

(24) a. No me acuerdo de [cuánto me ha-IND costado nada].

'I don't remember how much anything has cost.'

- b. For no_{xy} [item_x ∧ amount_y] [I remember that x cost y]
 (25) a. Apenas me acuerdo de [cuánto me ha-IND costado nada].
 'I hardly remember how much anything has cost.'

- b. For few_{xy} [item_x ∧ amount_y] [I remember that x cost y]

(24) と (25) では明らかにn語の量化的意味が異なるので、wh語だけでなくn語も埋め込まれた疑問構造で量化的可変性を示す。N語がwh語と同じように文の論理表示に変項を導入するなら、wh語もn語も限定節形成によって同じ量化副詞の量化領域に入り、wh語とn語が非選択的に束縛される。⁹⁾

Bermanの分析において埋め込まれた疑問を主節の量化副詞の領域へ写像することの理論的根拠は、Pre-supposition Accomodation (PA) である。PAは会話の適切性のために前提を談話の中に統合する操作で、これにより核作用域の前提が量化構造の限定節へ組み込まれる。つまり前提となるwh節のみが主節副詞の限定項として写像される。これは、補部が真であることを前提とするknow類の述語補部だけがwh語の量化的可変性を示し、補部が真であることを前提としないwonder類の述語補部は示さないという経験的一般化に一致する。

PiñarはBermanのこの提案をn語構造に対しても適用する。前提となる補部のみが主節副詞の限定の対象となるのなら、know類の補部内にあるn語のみがwh語と共に量化的意味の可変性を示し、wonder類の補部の疑問節内に含まれるn語の量化的意味は主節の量化副詞とともに変化しないはずである。(26) は主節動詞がknow類のacordarseであるが、埋め込まれた疑問節に含まれるwh語とn語は量化可変効果を示す。

- (26) a. Rara vez/Apenas me acuerdo de [qué asignatura ha elegido ningún estudiante].

I rarely/hardly remember which subject any students have taken.

- b. For few_{xy} [students_x ∧ subject_y ∧ take_{xy}] [I remember student_x ∧ subject_y ∧ take_{xy}]

それに対し (27), (28) では主節動詞は補部を前提としないwonder類のcuestionarseである。(27) の主節動詞は主節の述語を修飾しているとしか解釈できない。この場合に量化可変効果がないことは、主節の述語しか修飾できないapenasが適切ではないことによってさらに支持される。Wh節にn語も含まれると、Piñar自身認めているようにその判断は非常に微妙になるが、(28) でwh語とn語が対になる読みは (26a) と同じようには適切でない。(28) で学生と科目を対にする読みは可能だが、副詞の量化的意味の下に対にすることはできない。このことは、apenasの使用が不適切なことにより強調される。補部のn語は主節演算子の量化領域には入らないので、それによって束縛されない。

- (27) Rara vez/*Apenas me cuestiono [qué estudiantes harán trampa].

'I rarely/*hardly wonder which students cheat.'

- (28) Rara vez/*Apenas me cuestiono [qué asignatura habrá elegido ningún estudiante].

I rarely/*hardly wonder which subjects any students have taken.

それにもかかわらず(28)が排除されないのは、wh語もn語も、Bermanが疑問構造で無標値束縛者(default binder) と規定する潜在的普遍量化詞に局所的に束縛されるからだ Piñarは主張する。

このことからn語は (i) 局所的演算子に束縛されねばならないという条件と、(ii) DE演算子の認可(c統御)領域になければならないという二つの別個の条件を満たさねばならないと彼女は主張する。一方は局所的な条件で、他方はそうではないため、両者が二つの異なる演算子によって充たされる場合がある。(26a)と(28)の差は、(26a) では一つの演算子を変項としてのn語を束縛し、極性項目としてのn語を認可できるのに対し、(28) では束縛者と認可者が二つの異なる演算子であることによる。そのため、(26a) と (28) ではwh語とn語の量化的解釈が異なるのである。N語を極性項目として認可する要素と、変項としてのn語を束縛する演算子が (26a) のように一つの同じ演算子になるのは、n語がその極性認可者の局所的領域内にあるときである。

しかし前提となる平叙文と疑問文の差はBermanのPAに基く仮定では説明できない。このことから、PiñarはLahiri (1991) の提案する疑問繰上げ (Interrogative Raising=IR) にその説明を求める。Lahiriによる

とknow類の述語は命題タイプの構成素を選択するのに対し、wonder類の述語は疑問タイプの構成素を選択する。さらに全ての疑問補部は疑問タイプである。彼の仮定では、know類の述語は直接に命題タイプしか選択できない。全ての疑問補部が疑問タイプであるなら、疑問補部はタイプが一致しないので、know類述語とは直接に合成できない。そうするとknow類述語は疑問補部をとれないという誤った予測をしてしまう。そこでIRの規則が、LFで疑問補部を繰上げることによってこれらの場合を救済する。この繰上げにより命題タイプの痕跡が残され、know類述語はそれと適切に合成できる。

LahiriとBermanの提案の決定的な差は、Bermanが前提となる補部と前提とされない補部の区別しかしてないのに対し、Lahiriは疑問繰上げを受けるかどうかに関して疑問補部と命題補部の区別をしている点である。(29a), (29b)の対比は、Bermanの説明ではなく、Lahiriの説明と一致する。(29a)のwhich studentsは主節副詞の量化的意味をもっていると解釈できるが、(29b)のa studentはできない。(29b)は(29c)のようにパラフレーズできない。

- (29) a. I never remember [which students cheat].
 b. I never remember [that a student cheats].
 c. For no [student_x ∧ cheat_x] [remember (I) student_x ∧ cheat_x]

Lahiriは、rememberの疑問補部のみでIRが起こると主張している。従って(29b)の命題補部はIRを経ずに、直接rememberと合成できる。しかしBermanの説明では、疑問補部であろうと、平叙補部であろうと、PAが前提となる全ての補部に適用するので、(29b)と(29c)の差は説明できない。¹⁰⁾

2.4. 不定語分析のその他の証拠

N語が量化的可変性を示すことは、以下のようなより単純な構造でも見られる。

- (30) a. Nunca se le olvida ningún chiste.
 'S/he never forgets any jokes.'
 NO_x [joke'_x] [forget'(s/he) joke'_x]
 b. Rara vez se le olvida ningún chiste.
 'S/he rarely forgets any jokes.'
 FEW_x [joke'_x] [forget'(s/he) joke'_x]
- (31) a. Nunca se le olvida un chiste.
 'She never forgets a joke.'
 NO_x [joke'_x] [forget'(s/he) joke'_x]
 b. Rara vez se le olvida un chiste.
 'S/he rarely forgets a joke.'
 FEW_x [joke'_x] [forget'(s/he) joke'_x]

(30)は目的語位置のn語の解釈が量化副詞の量化力によって変化することを示している。(30)とは異なり、(31)は目的語位置をn語ではなく普通の不定語が占めている。それにもかかわらず、(30a)は(31a)と、(30b)は(31b)と同じ論理的解釈を受ける。Piñarはn語を意味的変項とする分析は、これらの文が示すn語と普通の不定語の並行したふるまいを自然に説明すると主張する。

3. Aranovich (1996) の分析

Aranovichは、n語認可はwh移動とほぼ同じ制約に従う統語的プロセスであるが、NPI認可は統語的ではなく、意味的/語用論的プロセスであると主張する。はじめにn語認可とNPI認可の彼による分析をそれぞれ概説し、次にそれらの差が不定語仮説に基きどのように説明されるかを見ることにする。

3.1. N語認可

Aranovichは動詞に後置するn語は(動詞に前置する)否定項目に認可されねばならないことから、次の条件を立てる。

- (32) N語認可条件: 動詞に後置する否定表現が動詞に前置する否定項目に認可されるのは、前者が後者にS構造で束縛、または統率されている場合のみである。¹¹⁾

動詞の後のn語とそれを認可する表現との間の関係は、wh語とその痕跡の間に成立する関係と類似している。Aranovichは移動の制約である島の効果が、強い島の場合も弱い島の場合もwh移動同様、n語認可も阻止することをその証拠とする。強い島の効果はwh移動同様n語認可の場合にも見られ、付加詞節、関係節、文主語を越えるn語認可は項も付加詞も不可能である。(33)は関係節の例である。

- (33) a. *No encontré los cigarillos [que fuma ninguno de tus amigos].

'I have not found the cigarettes that any of your friends smokes.'

- b. *No encontré los cigarillos [que tus amigos fumaron en ninguna habitación].

'I have not found the cigarettes that your friends smoked in any bedroom.'

また統率に対しては障壁になるが、束縛に対しては障壁にならない弱い島を越える場合、項のn語認可は可能だが、付加詞のn語認可は不可能なことが叙実動詞の補部、外置された節、間接疑問節について示されている。(34)は叙実動詞の補部の例である。

- (34) a. Gaby no advirtió que Andy había leído ninguno de sus diarios.

'Gaby didn't realize that Andy had read any of his diaries.'

- b. ??Gaby no advirtió que Andy se había comportado con ninguna delicadeza.

'Gaby didn't realize that Andy behaved with any tact.'

N語認可がwh移動と類似した制約に従うことは認めるものの、AranovichはPiñar同様n語認可に移動は関与していないと主張する。その証拠に直説法補文境界を越えるn語認可には項/付加詞の非対称性があるのに、wh移動にはないことが挙げられる。

- (35) a. Yo no vi [que Isabel abrazaba a ninguno de tus amigos].

'I did not see that Isabel was hugging any of your friends.'

- b. *Yo no vi [que Isabel se estaba comportando con ninguna delicadeza].

'I did not see that Isabel was behaving with any tact.'

N語がin situ認可されるという仮定では、付加詞位置にあるn語は、中間のCOMPが最も近い可能な統率者なので、主節のnoによって認可されない。それに対し、束縛は極小性の条件に従わないので、項位置にあるn語は主節のnoに認可される。

以上の分析の問題点は、埋め込まれた文が接続法の場合、項/付加詞の非対称性がなくなり、付加詞のn語も接続法節内では認可されることにある。

- (36) No quiero [que vuelvan nunca por aquí].

'I do not want that you ever come-SUBJ back around here.'

Progovac (1994)はセルボ・クロアチア語においても接続法節がn語認可の領域を拡大することを、接続法節内の機能範疇は主節の否定表現がn語を認可するときに不可視になるという仮定により説明する。しかし、セルボ・クロアチア語ではn語が接続法節の主語にある場合主節の否定表現に認可されないが、スペイン語ではそれが可能である。Aranovichは接続法節内のCOMPが[+Neg]素性をもつというLaka (1990)の提案を採用し、それがn語認可に必要な統率の連鎖においてリンクになると仮定する。

- (37) [... no ... [_{CP} [+N] que [... nunca ...]]]

3.2. NPI認可

Aranovichは、Erteschik-Shir (1973)がwh移動に対する制約を説明するのに用いた意味的支配(semantic

dominance) という語用論的・機能論的概念に基いて疑問や否定を捉えるべきだという立場を取る。彼は active field (AF) という概念を導入し、Erteschik-Shirの観察を、文の従属的な部分が疑問・否定演算子のAFの外にあると言いかえることができると主張する。それによると、NPI認可には統語論的要因は関与せず、意味的要因と語用論的要因の両方が役割を果たす。意味的には、NPIはDE演算子のAFになくはならない。語用論的には、文の意味的に従属的な部分は、メタ言語的な用法でない限り、疑問または否定演算子のAFの外にある。彼の主張は、次の原理に要約される。

(38) Active Field Principle: 中立的な読みでは、否定や疑問のような文演算子のactive fieldは、文の支配的な部分しか含まない。

Aranovichによると、演算子のAFは語用論的要因によって変化するので、否定や疑問が拒絶やincredulityの読みになる場合はAFが拡張されて認可されると説明できる。それに対して、意味的作用域は項と機能の関係なので、文の読みが変化しても一定である。従ってNPI認可は意味的作用域ではなく、語用論的AFに基いて説明されると彼は主張する。{ } でくくられた部分は文の従属的部分であり、() でくくられた部分が演算子NEGまたはINTのAFであるとする、(39a) においてのみNPIがtriggerのAF内にあることになる。

(39) a. NEG/INT {I think} (that the baby ate any rice).

b. NEG/INT (Sandy mumbled) {that the children were playing any acid jazz}.

これは中立的な読みの場合に成り立ち、語用論的に有標な読みの場合の表示は(40)のようになる。否定・疑問演算子のAFは支配的な部分だけではなく、従属的な部分も含む。

(40) a. NEG/INT ({I think} that the baby ate any rice).

b. NEG/INT (Sandy mumbled {that the children were playing any acid jazz}).

またAranovichは、NPI認可にはProgovac (1994) の提案するようにLF移動が関与しているのではないと主張する。ProgovacはNPI認可が、移動の制約である特定性の制約、島の制約、ECP、主題化された位置からの制約に従うことを示そうとしたが、それらは全て語用論的な要因と認可者の作用域の定義との相互作用の結果として分析できると主張する。

さらに、彼の意味論・語用論的分析を支持する事実として、二つの現象が論じられている。第一に、多重疑問文のようなLF移動は項/付加詞の非対称性を示すが、NPI認可の場合は項/付加詞の非対称性は見られず、いずれの場合も中立的な読みでは完全に文法的ではないことである。移動の場合には前置されたwh語と痕跡を関係付けるのに、統率と束縛の二つのメカニズムがあり、それぞれが異なる局所性の制約をもつために項/付加詞の非対称性が生じる。それに対して、NPIが認可者のAF内になければいけないという条件では、認可のメカニズムは全ての場合に同じなので、項/付加詞の非対称性は生じない。また拒絶やincredulityの読みの下では、AFが拡張され、NPIが認可される。

第二点は、条件文の場合である。条件文では、前提節(protasis)にあるNPIが意味的に従属している構成素の中にあるか否かによって差は生じず、常に認可される。このことは条件文のAFは語用論的要因の影響を受けないことにより説明される。統語的移動の分析では、同じ構造的条件が全ての認可者の場合に当てはまるという予測をするが、NPIが条件文の前提節にある場合には同じ条件が成立しないので、一般化が失われる。さらに純粹に統語的な分析では、語用論的な要因に対する反応も説明できない。

3.3. 不定語としてのn語とNPI

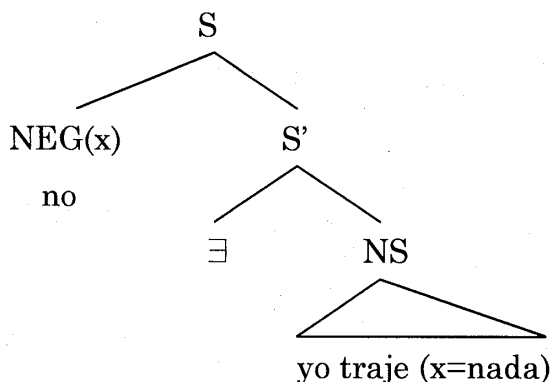
N語もNPIも量化詞ではなく、量化的意味を得るのに外部演算子を必要とする不定語であるというAranovichの主張は、Nishigauchi (1990)の日本語の分析に依拠している。Nishigauchi (1990)はKuroda (1965)に基き、日本語の不定代名詞も不定語として分析されるべきであり、不定代名詞の「誰」や「何」は疑問演算子「か」、あるいは否定演算子「な」によって非選択的束縛を受ける自由変項であると主張している。

Aranovichは、NPIとn語の分布が通常的不定語よりも限られていることを指摘する。不定語が単独でも現

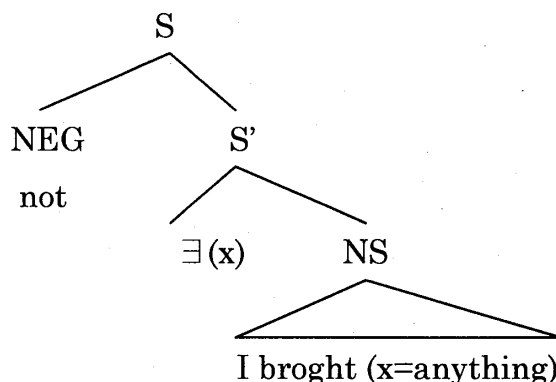
れることが可能で、その場合はdefaultの存在閉鎖により量的意味が与えられるのに対し、NPIとn語は必ず外部束縛者を必要とする。この点でNPIとn語は同じ特性をもつ。両者の差は、閉鎖のメカニズムの違いによるもので、n語が日本語の不定代名詞のように演算子に非選択的に束縛されるのに対し、NPIはDEの演算子に存在閉鎖される。従って、n語とNPIが目的語位置に現れ、否定表現と依存関係をもつ場合には、次のように異なる表示をもつと彼は主張する。

- (41) a. Yo no traje nada.
 'I didn't bring anything.'
 b. I did not bring anything.

(42) a.



b.



N語とNPIの以上の性質をAranovichは不定仮説として次のように要約する。

(43) 不定仮説 (Indefinite Hypothesis = IH)

- A) N語は否定演算子に非選択的に束縛されねばならない不定語である。
 B) NPIはDE演算子の作用域内で存在閉鎖されねばならない不定語である。

否定による閉鎖の標的としてのn語は、日本語の不定代名詞と同じ類に位置すべきであると彼は主張する。日本語の不定代名詞は、文脈によっては否定として、または疑問として解釈できる。このことは否定と疑問の類似性を示唆している。その一つの証拠は、否定一致が、多重疑問と並行しており、動詞の前に他の否定または疑問演算子がないとn語もwh語も動詞の後に現れることができないことである。従って、スペイン語のwh語とn語は、形態的に異なる不定代名詞として分析できると彼は提案する。

非選択的束縛の典型的な領域は、n語が演算子の限定節にある場合、即ち量化名詞句を修飾する関係節、量化副詞と共に生じる条件節に生じる場合である。しかしn語認可とその他の非選択的束縛の形式には差が見られ、n語は否定表現の限定内にあるだけでは認可されない。N語は否定語を修飾する関係節内でも、否定量化詞を限定する条件節内でも認可されないのである。

- (44) a. *No conozco a ningún criador que compre ningún toro campeón al contado.
 'I don't know any breeder that pays for any champion bull in cash.'
 b. *Gaby jamás mira televisión cuando lee ningún libro.
 'Gaby never watches TV when she reads any books.'

Aranovichは、この場合には、演算子が否定一致の要求するX⁰レベルではないことにより説明できるのではないかと述べるにとどまっている。

3.4. N語認可とNPI認可の局所性条件の差

以下の例では、n語認可もNPI認可も節境界を越えて行われており、両者に差がないように見える。しかしこれらはいずれも主動詞が橋渡し動詞 (bridge verbs) の場合である。

- (45) No quiero que visites a ninguno de sus amigos.

'I don't want you to visit any of their friends.'

- (46) a. I don't think that the baby ate any rice.
b. I don't believe that I knew anybody at the party.
c. Nobody said that they have ever visited Las Vegas.

他の動詞の場合は、n語に対しても、NPIに対しても共に、認可に不透明な領域を形成する。以下は強い島の効果が見られる場合で、(47) はn語が付加詞節内で認可されないことを、(48) は文主語を越えてn語が認可されないことを示している。

- (47) a. *No robaron el banco [mientras dormía ninguno de sus amigos].
'They did not rob the bank while any of the guards was sleeping.'
b. *No robaron el banco [mientras los serenos dormían en ningún lugar].
'They did not rob the bank while the guards were sleeping in any place.'
(48) a. *Martina no cree [que [vestir ninguna falda] distraiga a Gabriela].
'(Martina does not believe that wearing no skirt will distract Gabriela.)'
b. *Martina no cree [que [tirar la pelota hacia ningún lado] distraerá a Gabriela].
'(Martina doesn't believe that sending the ball nowhere will distract Gabriela.)'

同じ強い島の効果が、一見NPI認可の場合にも見られるように思われる。

- (49) a. ?Max doesn't want to have lunch [where they prepare any Mexican food].
b. ?Max doesn't think [that [baking anything at home] will save him money].

しかし英語の (49) は、スペイン語の (47), (48) のように完全に非文法的ではない。この微妙な判断の差が有意義であることは、否定が前言あるいは文脈的に存在する命題の拒絶として使われた場合に文法性の差が生じることにより示されるとAranovichは主張する。前言の拒絶はGod-damnedのような表現を付加することによって強調される。英語では (49) にGod-damnedを加えた (50) で付加節詞内、文主語内のNPI認可は可能になる。しかしスペイン語の (47a), (48a) にGod-damned に相当するpuñeteros(-a) を加えても文法性は改善しない。

- (50) a. Max doesn't want to have lunch [where they prepare any God-damned Mexican food].
b. Pat does not believe [that [baking any God-damned bread at home] will save her money].
(51) a. *No robaron el banco [mientras dormía ninguno de los puñeteros serenos].
'They did not rob the bank while any of the God-damned guards was sleeping.'
b. *Martina no cree [que [vestir ninguna puñetera falda] distraiga a Gabriela].
'(Martina does not believe that wearing no God-damned skirt will distract Gabriela.)'

従って、通常の否定と拒絶の場合との対比において、n語認可とNPI認可は異なった反応を示すので、両者は異なった現象として扱われるべきであるとAranovichは述べる。

N語認可とNPI認可は叙実動詞の補部の場合にも差を示す。スペイン語の叙実動詞は補文内で動詞の後にあるn語が項の場合にはそのn語を認可するが、n語が付加詞の場合には認可しない。

- (52) a. Gaby no advirtió [que Andy había leído ninguno de sus diarios].
'Gaby didn't realize that Andy had read any of his diaries.'
b. ??Gaby no advirtió [que Andy se había comportado con ninguna delicadeza].
'Gaby doesn't realize that Andy had behaved with any tact.'

英語の叙実動詞も補文からの取出しに関しては弱い島を作るが、NPI認可の場合には弱い島を特徴付ける項/付加詞の対比がなくなる。叙実補部内の項位置にあるNPIは完全には認可されない。付加詞位置の場合も、項位置の場合と同じように完全には認可されない。

- (53) a. ?Sam didn't realize [that the tourists did anything].
b. ?Sam didn't realize [that the tourists lit a fire anywhere].

N語認可とNPI認可のこの差をより明らかにするのは、否定の拒絶としての使用により叙実補部内のNPI認可は文法性が高くなるが、n語認可には影響がないことである。

- (54) a. Sandy didn't remember [that the City Council debated any God-damned thing].
b. Sandy didn't realize [that the cat had left a spot on any God-damned furniture].
- (55) a. ??Gaby no advirtió [que Andy se había comportado con ninguna maldita delicadeza].
'Gaby didn't realize that Andy behaved with any God-damned tact.'
b. ??Gaby no recuerda [que Andy consiguió el trabajo a través de ninguno de sus malditos amigos].
'Gaby doesn't remember that Andy got the job through any of his God-damned friends.'

以上のことから、Aranovichはn語認可条件と否定極性認可条件とは互いに異なる条件であることを、局所性の仮説としてまとめている。

(56) 局所性の仮説 (Locality Hypothesis=LH)

- A) N語認可条件：動詞の後のn語はS構造で動詞の前の否定表現に束縛または統率されねばならない。
B) 否定極性認可条件：NPIはtriggerのactive fieldになければならない。

3.5. N語認可とNPI認可における認可者の差

関係節、間接疑問においても、n語認可は妨げられるが、NPI認可は可能であるという差がある。Aranovichはこの対比を局所性の差ではなく、認可者の種類の差に帰している。関係節はn語認可にとって強い島であることを彼は指摘する。

- (57) a. *Nunca leo [libros [que tengan ninguna página marcada]].
'I never read books which have any pages marked.'
b. I never read [books [which have any pages missing]].

関係節を越えるNPI認可は常に可能なわけではなく、関係節内のNPIは特定性効果を示すことをAranovichは(58)で示している。(58)の関係節はどちらも不定名詞句内にあるが、定名詞句の場合n語認可もNPI認可も不可能になる。

- (58) a. *Nunca leo [los libros [que tienen ninguna página marcada]].
'I never read the books which have any pages marked.'
b. *I never read [the books [which have any pages missing]].

間接疑問はn語認可にとって弱い島で、項位置のn語は主節の否定表現に完全には認可されない。付加詞のn語は全く認可されない。

- (59) a. ?No me preguntaron [si vi a ninguno de mis amigos en la terraza].
'They did not ask me if I saw any of my friends on the deck.'
b. *No me preguntaron [si habían venido mis amigos nunca por aquí].
'They did not ask me if my friends ever came around here.'

それに対しNPIは間接疑問内に、項としても付加詞としても現れることができる。

- (60) a. They didn't ask me [if I saw any of my friends on the deck].
b. They didn't ask me [if my friends ever came around here].

関係節と間接疑問におけるn語認可とNPI認可に見られる差は、局所性の差ではなく認可者の種類の差にあるとAranovichは論じる。その証拠に(61)、(62)が挙げられる。普遍量化詞を修飾する関係節にあるNPIは認可されるが、n語はそのような演算子に認可されない。

- (61) a. [Everybody [that has ever visited Cuba]] was arrested.
b. *[Toda persona [que visitó Cuba nunca]] fue arrestada.
'Everybody that has ever visited Cuba was arrested.'

間接疑問内のNPIは主節に否定表現がなくても認可される。

(62) a. They asked me [if I saw any of my friends on the deck].

b. They asked me [if my friends ever come around here].

このようにNPIは間接疑問と関係節で主節の否定表現の存在とは独立に認可され得るので、この対比は、局所性条件ではなく認可者の差に帰せられるとAranovichは結論付ける。

4. 考察

以上で見たPiñarとAranovichの提案は次のような表にまとめることができる。

	Piñar (1996)	Aranovich (1996)
N語とNPI	N語もNPIも不定変項	N語もNPIも不定変項 N語とNPIは分布、認可者、局所性が異なる
	N語認可はNPI認可のサブケース	N語認可：統語的プロセス NPI認可：意味・語用論的プロセス
閉鎖の種類	非選択的束縛	N語認可：非選択的束縛 NPI認可：存在閉鎖
不定語仮説の根拠	N語の量化力的意味の可変性 N語が否定の意味内容をもたない	日本語の不定代名詞との類似性 N語認可とNPI認可の相違を閉鎖の種類 の差として説明
動詞前のn語	SpecNegPに位置 Spec-head一致により認可	SpecNegPに位置 形態的素性によりn語が否定演算子を認可
動詞後のn語	C統御する affective要素により in situ認可	S構造で束縛/統率する否定要素により in situ認可
In situ認可の根拠	複合名詞句内の特定性効果 関係節内の直説法/接続法の非対称性	項/付加詞の非対称性
直説法/接続法の非対称性	LakaのNegComp不採用 前提(直説法)補部のLFでの繰上げ	LakaのNegComp採用
特定性の効果	特定的名詞句のLFでの繰上げ	関係節の特定性効果のみ指摘
メタ言語否定	考察せず	認可条件の相違の根拠

まず n語とNPIの類似性と相違点であるが、PiñarとAranovichは二人ともn語が否定量化詞であるとする説、及び生起する位置によって全く異なる要素であるという主張は退ける。従って少なくともn語がNPIと同類の項目であることは両者とも認めている。Piñarは上述第1節で挙げた(2)~(5)のような例を証拠として、n語がNPIであるというBosque-Lakaによる提案を殆ど議論することなく受け入れている。しかも(2)のような疑問文は普通の読みでは適格な文ではなく、修辞疑問(rhetorical question)の読みしかないということを彼女は注で指摘しているだけである。方言差はあるにせよ、Aranovichが挙げている(6)と(7)の差は少なくとも検討すべきである。

Aranovichは通常n語をNPIとみなす根拠とされる比較構文や反意述語の補部に生起するn語は自由選択項目であるとして、否定一致のn語と区別し、n語認可の議論からはずしている。しかし最上級のn語は単文では句比較の文脈にしか現れることができない点でanyよりも分布が限定されるのだが、この差についての説明は与えられていない。また彼自身指摘しているように、反意述語はDE文脈から排除されてしまうわけではない。従って反意述語を最上級のn語として区別すべきかは疑わしい。そうすると句比較や反意述語補部に現れるn語は自由選択項目と同一視できないので、n語が彼の言うように2種類に分れるべきであるかも疑わしい。さらに最上級のn語もなんらかの演算子によって認可されなければならない要素であるが、彼の分析では

その認可のプロセスは否定のn語認可とは異なるものであるということになり、一般化が失われる。N語の分布がNPIより限定されていることは事実である。そもそも言語によってNPIを認可できる要素に差があることは周知の事実である (Kato and Kato 1997参照)。そのことに基き各言語の極性項目が英語のNPIと異なると主張しても一般化が失われるだけである。従って分布の相違に基きn語とNPIを区別するAranovichの議論はそのままの形で受け入れることはできない。

Aranovichは語用論的要因を考慮に入れた分析を試みており、n語認可は統語的なプロセスであるのに対し、NPI認可は彼の提案するactive fieldという概念に基く意味的・語用論的プロセスであると主張し両者を区別する。そこではNPI認可の構造的要因はAFを定義する要因の一つであるにすぎない。AF分析は、一方では統語的分析で説明のつかないデータにも説明を与えるが、その中心概念であるAFの定義や、それがどのように決定されるのか、あるいは文の意味的に支配的な部分、従属的な部分というのがどのように決定されるのかについては具体的に何も示されていない。従って、NPI認可を意味的作用域の概念に基いてではなく、AFに基いて語用論的に捉えるべきであるとする彼の主張は、これらのことが明確にされない限り、正しく評価できない。

AranovichはNishigauchi (1990)による日本語の不定代名詞を不定語とする分析を不定仮説の根拠として挙げている。しかし最大の動機付けは、n語認可とNPI認可の差を不定仮説により閉鎖のメカニズムの差として説明できることにあると思われる。だが上で述べた理由で、n語認可とNPI認可の差を根拠とする不定仮説に関する彼の議論も現在の形のままでは受け入れることはできない。

PiñarはBosque-Lakaによるn語のNPI分析を踏襲しているが、不定仮説をとった点で彼らの主張と分岐する。不定仮説の一つの根拠はn語の量化的意味が普通の不定語やwh語同様、演算子によって変化することにある。この議論は事実が正しければ、不定仮説のかなり強力な証拠になる。また彼女はNeg ... [QNP ... N-word] 構文の分析でNegとQNPが結びついてn語を認可するという興味深い提案をしている。これが正しければ彼女が指摘するとおりn語には否定の意味内容がないことの証拠となり、不定語仮説のもう一つの根拠となる。但しNegとQNPが結びつくというのがどのようなメカニズムで行われるかが明らかにされなければならない。

Piñarの主張で注目されるのは直説法/接続法の対比を補文の前提性に基いて説明し、それと並行して名詞句の文法性の対比を特定性に基いて説明していることである。この仮定が正しければUribe-Etxebarria (1994)により問題性が指摘されていたLaka (1990)のNeg Comp案を排除することができる。また前提性と特定性の概念の密接な関係を捉えることも可能になる。しかし前提となる節及び特定の名詞句のLFでの移動が何故生じるのかを理論的に明らかにするべきである。

Aranovichはn語認可とNPI認可の相違点を示すことを主眼とするため、Piñarと比較するとn語認可に関しては扱う事実が限られている。しかしAranovichだけが繰り返し問題にしているのは項/付加詞の非対称性である。これはn語認可に移動は関わっていないということの証拠となっている。N語認可には移動は関わらず、in situで認可されるという主張は二人に共通している。

N語を認可する要素に関しては二人の主張は異なるが、n語認可が非選択的束縛であるという主張は共通している。Aranovichはまた普通の不定語が束縛される全ての領域でn語認可が可能でないことをも指摘している (例文 (45) 参照)。さらにAranovichは普通の不定語は外部演算子がない場合にdefaultの存在閉鎖が可能であるのに対し、n語は必ず外部認可者を必要とする点が異なると指摘している。彼ら自身ははっきりと述べてはいないが、不定仮説が正しいとすれば、その利点はn語 (NPI) を不定語というより大きな範疇の中で捉えることができることである。その意味で不定語仮説は先行研究と矛盾するものではなく、n語 (NPI) の性質と認可のプロセスをより一般的に捉えることを可能性を開くものとして注目される。¹²⁾

<注>

- 1 Acquaviva (1997), Depréz (1997), Ladusaw (1992, 1996) 等。
- 2 Heimによると不定語はそれ自体で量化力を持たず、最も近くにある量化詞の領域内で束縛される自由変項のようにふるまう。不定語によって導入される変項は、存在量化詞、量化副詞、量化限定詞のような外部演算子に束縛されねばならない。外部演算子による束縛を閉鎖 (closure) と呼ぶが、閉鎖には存在閉鎖 (existential closure) と、非選択的束縛 (unselective binding) の二つの異なるメカニズムが用いられる。量化詞の量化領域を構成する限定された集合は、その限定 (restriction) と呼ばれ、限定節としてLFで表示される。量化詞は、Quantifier ConstrualとHeimが呼ぶプロセスによって節に付加することでその作用域を得る。その結果、量化詞、量化詞の領域を構成する限定節、核作用域 (nuclear scope)、以上3つの部分からなる論理構造が得られる。量化詞はその領域内に現れるどの変項をも束縛することができ、その場合が非選択的束縛である。それに対し存在閉鎖は演算子の核作用域に適用する。不定名詞句が量化詞なしで現れる場合はdefault操作により存在閉鎖される。
- 3 (*no) は出現不可、*(no) は省略不可を示す。
- 4 AranovichはNPIがn語とは異なり主語位置に来られないことは次の条件によるものであると提案する。
(i) SPEC-NegP条件：NPIはNegPのSPECに現れることはできない。
この条件は不定仮説 ((44) 参照) 及び、機能範疇のSPECは存在閉鎖の領域外にあるという仮定によって動機付けを与えられる。IHによるとNPIは存在閉鎖されねばならず、NPIがNegPのSpecから除外されるのは、その位置では存在閉鎖されないからということになる。それに対し、n-語は存在閉鎖される必要がないので、NegPのSPECに現れることができる。機能範疇のSPECが存在閉鎖の領域外にあるという仮定の動機付けは、Diesing (1992) に依拠している。Diesingはindividual-level 述語のbare plural主語が総称的な読みになるのは、それが導入する変項が抽象的な総称演算子に束縛されるときであると仮定している。彼女はさらに、bare pluralの総称的な読みはIPのSPECに結びつき、存在的な読みはVPのSPECに結びついていることを示している。言いかえると、individual-level述語と共起する不定語は、IPのSPECに現れ、その位置は存在閉鎖の領域にないということである。同じようなことがNegPにも生じる。NegPのSPECはIPのSPEC同様存在閉鎖を受けないので、NPIは動詞の前には来られないという説明になる。
- 5 さらに否定一致のn語はcasi 'almost'による修飾が可能で、補部に物質名詞をとれ、限定詞に所有代名詞のあるNPを越えて他の否定表現と関係を確認できない。それに対して最上級のn語はcasi 'almost'による修飾が不可能で、補部に物質名詞をとれない。また自由選択のanyと同じように可算名詞しかとれず、DE環境がなく、普遍限量詞の意味をもつと解釈される。Aranovichはこれらの事実はn語をNPIとみなす仮説の反例になるとする。
- 6 Piñarはまたcreer 'believe'のような非叙実的動詞の直説法補部にあるn語が主節の否定によって認可される読みを全く拒絶はしない話者がいるという事実も節繰り上げ仮説を支持すると主張する。
(i) ??Juan no se cree [que conoces-IND a ningún artista].
'Juan does not believe that you know any artists.'
Piñarによると(i)に否定一致の読みが可能なのは、直説法補部の非前提的読みの下だけである。このことは直説法/接続法の形態的な差ではなく、補部が前提であるか否かが節の境界を越える否定一致の可能性を決定するというを示すものだと彼女は結論付ける。
- 7 Piñarも指摘しているように、(19)のような文は曖昧で、'I don't believe that nobody knows anything'の読みも可能である。Piñarは何も述べていないが、その場合はKato (1997) で指摘したように主節の否定とは独立して埋め込まれた節にもNegPがあると仮定できる。
- 8 これらの文のn語が埋め込まれた節内でwh語または+wh Compに認可されるのではないことは、(i) ~ (iv)が示している。

- (i) Nunca sé [qué asiento le corresponde-IND a nadie].
 'I never know which seat belongs to anybody.'
- (ii) *Sé [qué asiento le corresponde-IND a nadie].
 #I know which seat belongs to anybody.'
- (iii) Rara vez me acuerdo de [cuánto me ha-IND costado nada].
 'I rarely remember how much anything cost.'
- (iv) *Siempre me acuerdo de [cuánto me ha-IND costado nada].
 #I always remember how much anything cost.'

(i)と(ii)の対比は、埋め込まれた疑問がn語の認可者ではないことを示している。(iii)と(iv)の差は、主節の副詞がDEであるか否かだけである。

- 9 埋め込まれた疑問によって形成される全ての量化構造がn語認可の正しい環境になるわけではないことをPiñarは指摘する。認可が可能なのは(i)のようにwh補部を量化する演算子がDEのときのみである。これは、n語をNPIとみなす仮定から予測される。

- (i) a. Rara vez me acuerdo de [cuánto me ha-IND costado nada].
 'I rarely remember how much anything has cost.'
- b. *Siempre me acuerdo de [cuánto me ha-IND costado nada].
 'I always remember how much anything has cost.'

- 10 Piñarは、PAもIRも文法には存在するが、異なる目的をもつと考える。IRは特定の疑問構造を解釈するために、合成分析において必要な規則である。IRがないとknow類の述語は疑問補部と合成できず、文に真値値が与えられない。他方、PAの目的は作用域の付与である。ほとんどの場合PAはそれが標的とする構成素に最も広い作用域を付与するが、その理由をPiñarは異なる種類のQPが異なる位置で作用域をとるとするBeghelli and Stowell (1995)の作用域の理論により説明できるのではないかということを示唆している。
- 11 Aranovichはこの定義においてもn語ではなく「否定表現」の認可という表現を用いているので、彼はPiñarと異なりn語を否定の意味内容をもった要素と見なしていることが分る。
- 12 不定仮説とは直接関係ないが、二人共動詞の前のn語認可については別扱いにして認可条件を立てている点は問題点として指摘したい。N語を全ての位置で同じ要素として扱う分析では、動詞の前の位置についても、動詞の後の位置についても、統一的に認可されるべきである。この点に関しては、Kato (1997)で提案した認可条件を参照されたい。

参考文献

- Acquaviva, P. (1997) *The Logical Form of Negation: A study of Operator-Variable Structure in Syntax*, Garland, New York.
- Aranovich, R. (1996) *Negation, Polarity, and Indefiniteness: A Comparative Study of Negative Constructions in Spanish and English*, Doctoral dissertation, University of California, San Diego.
- Beghelli, F. and T. Stowell (1995) *Distributivity and Negation*, Manuscript, UCLA.
- Berman, S. (1991) *On the Semantics and Logical Form of Wh-Clauses*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Bosque, I. (1980) *Sobre la negación*, Cátedra, Madrid.
- Bosque, I. (1994) "La negación y el principio de las categorías vacías," *Gramática del español*, ed. by V. Demonte, 167-199, El Colegio de México, Centro de Estudios Lingüísticos y Literarios, México.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, Mass.

- Cinque, G. (1980) "On Extraction from NPs in Italian," *Journal of Italian Linguistics* 4, 47-99.
- Depréz, L. (1997) "Two Types of Negative Concord," *Probus* 9, 103-143.
- Diesing, M. (1992) *Indefinites*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Erteschik-Shir, N. (1973) *On the Nature of Island Constraints*, Doctoral dissertation, MIT.
- Heim, I. (1982) *The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrase*, Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Hoeksema, J. (1983) "Negative Polarity and the Comparative," *Natural Language and Linguistic Theory* 1, 403-434.
- Horn, L. and Y.-S. Lee. (1995) "Progovac on Polarity (review article)," *Journal of Linguistics* 31, 401-434.
- 加藤ナツ子 (1995) 「スペイン語の否定構文 -n語とその認可条件について」『駒沢女子大学研究紀要』第2号、167-177.
- Kato, N. (1997) "Local Licensing of N-words in Spanish." *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eightieth Birthday*, 394-407, Taishukan, Tokyo.
- Kato, N. and Y. Kato (1997) *Negative Polarity: A Comparative Syntax of English, Japanese, and Spanish*, Paper presented at the 16th International Congress of Linguists, Paris.
- Kuroda, S.-Y. (1965) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*, Doctoral dissertation, MIT.
- Ladusaw, W. (1979) *Polarity Sensitivity as Inherent Scope Relations*, Doctoral dissertation, MIT.
- Ladusaw, W. (1992) "Expressing Negation," *Working Papers in Linguistics* 40, ed. by C. Baker and D. Dowty, 237-259, Ohio State University.
- Ladusaw, W. (1996) "Negation and Polarity Items," *The Handbook of Contemporary Semantic Theory*, ed. by S. Lappin, 321-341, Blackwell, Oxford.
- Lahiri, U. (1991) *Embedded Interrogatives and Predicates that Embed them*, Doctoral dissertation, MIT.
- Laka, I. (1990) *Negation in Syntax: On the Nature of Functional Categories and Projectionis*, Doctoral dissertation, MIT.
- Longobardi, G. (1991) "In Defense of the Correspondence Hypothesis: Island Effects and Parasitic Constructions in Logical Form," *Logical Structure and Linguistic Structure*, ed. by James Huang and Robert May, 149-196, Kluwer, Dordrecht.
- Moritz, L. and D. Valois (1992) "French Sentential Negation and LF Pied-Piping," *Proceedings of NELS* 22, 319-333. GLSA, University of Massachusetts, Amherst.
- Moritz, L. and D. Valois (1994) "Pied-Piping and Specifier-Head Agreement," *Linguistic Inquiry* 25, 667-707.
- Nishigauchi, T. (1990) *Quantification in the Theory of Grammar*, Kluwer, Dordrecht.
- Piñar, P. (1996) *Negative Polarity Licensing and Negative Concord in the Romance Languages*, Doctoral dissertation, University of Arizona.
- Progovac, L. (1994) *Negative and Positive Polarity*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Rizzi, L. (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- Stowell, T. (1993) *The Syntax of Tense*, Manuscript, UCLA.
- Suñer, M. (1995) "Negative Elements, Island Effects and Resumptive *no*," *Linguistic Review* 12, 233-273.
- Torrego, E. (1986) *Empty Categories in Nominals*, Manuscript, University of Massachusetts, Boston.
- Uribe-Etxebarria, M. (1994) *Interface Licensing Conditions on Negative Polarity Items: A Theory of Polarity and Tense Interactions*, Doctoral dissertation, University of Connecticut.
- Valois, D. (1991) *The Internal Syntax of DP*, Doctoral dissertation, UCLA.

Zanittini, R. (1991) *Syntactic Properties of Sentential Negation: A Comparative Study of Romance Languages*, Doctoral dissertation, University of Pennsylvania.